

## へき地教育の現状と課題 ー閉校する山間小規模小学校への6年間の訪問・交流を通してー

松原眞志夫

東京福祉大学 教育学部(名古屋キャンパス)  
〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内2-13-32  
(2010年9月16日受付、2010年11月19日受理)

抄録:へき地校の数は全国的に年々減少している。山間部、半島部、島嶼部はもとより、大都市中心部でも人口のドーナツ化に伴い同様の現象が起きている。各自治体は存続に努力しているが、過疎化、少子化に財政負担の重圧も加わり、明治以来の歴史ある小中学校が次々と閉校し、廃校や統合のやむなきに至っている。私は、前任の大学のゼミ学生を引率してそれらの学校5校を訪問した。その中心は、2003年4月から6年間にわたる愛知県額田町立(市町の合併後岡崎市立)鳥川小学校(2009年度の全校児童数6名の山間小規模校。2010年3月閉校)への訪問であった。本報告では、訪問・交流を通して児童の努力や教員の工夫、地域の人たちの思いを受け止め、へき地校が持つ優れた教育を記録するとともに、閉校に関わる課題について検証した。  
(別冊請求先:松原眞志夫)

キーワード:へき地校、小規模校教育、複式学級、地域の思い、閉校後の課題

### 1 へき地学校の現状

#### 1) 全国の状況

岡崎市立鳥川小学校は「へき地教育振興法」に記された定義に該当する学校である。「へき地学校」については、「へき地教育振興法」(昭和29年6月1日法律第143号・最終改正:平成18年3月30日法律第18号)第2条に以下のように記されている。

「この法律において『へき地学校』とは、交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域に所在する公立の小学校及び中学校並びに中等教育学校の前期課程並びに学校給食法(昭和29年法律第160号)第5条の2に規定する施設(以下「共同調理場」という。)をいう。」

へき地校の認定については、「へき地教育振興法」に示された基準点数と付加点数の合計によって、1級(45点から79点)から5級(200点以上)の5区分のいずれかに指定され、5級が最も恵まれない学校とされている。それ以外に、1級に満たない点数の学校でも、都道府県独自の基準により、「へき地校に準ずる学校」及び「指定学校」を指定することができる。

2006年5月1日現在の文部科学省「学校基本調査」によ

れば、小、中学校の「へき地学校」の合計で最も多いのは、北海道の981校、次は、鹿児島県の406校、福島県の238校、新潟県の186校、長崎県の184校、岩手県の180校、沖縄県の166校の順になっており、人口に比べて面積が広い、あるいは山間部、離島を多く持っているなどの道県が並んでいる。

#### 2) 愛知県のへき地学校

「へき地教育振興法」の基準による愛知県の指定は、愛知県教育委員会の資料によれば2007年度、小学校52校、中学校13校で、このうち、特別地域に指定された学校は、小学校6校、準へき地学校は小学校9校、中学校2校である。また、1級に指定された学校は小学校33校、中学校10校、2級は小学校4校、中学校1校である。3級、4級、5級に指定されている学校はない。

旧額田町(現岡崎市)には8つの小学校がある。2007年5月現在の児童数を多い順に記すと、次のようになる。豊富小学校281名、下山小学校63名、夏山小学校47名、宮崎小学校45名、形埜小学校39名、大雨河小学校15名、千万町小学校10名、鳥川小学校9名。このうち、宮崎小学校、形埜小学校、大雨河小学校、千万町小学校、鳥川小学校の5校が1級指定の学校になっている。2010年3月に3校が閉校とな

り、大雨河小学校と千万町小学校は宮崎小学校に、また、鳥川小学校は豊富小学校に統合された。鳥川小学校は前任大学のゼミ生を引率して2003年から6年間にわたって訪問・交流した学校である。

### 3) へき地教育の振興

へき地教育は、山間・離島などで行われる教育が一般的で、児童・生徒数が少ないため複式学級が多く見られる。このため、「へき地教育振興法」には、へき地における教育の水準の向上を図ることを目的とし国および地方公共団体がへき地における教育を振興するために実施しなければならないことが細かく定められている。

そのうち、教員配置については、「条例において定める」とされているため、都道府県によって若干の違いはあるが、例えば北海道では、1学級の小学校は、校長1名、教諭1名のみが配置されていて、教頭、養護教諭、事務職員は配置されていない。一方、大阪府や愛知県の場合、教員は、1校1学級の学校でも、校長1、教頭1、教諭2、養護教諭1、事務職員1名が配置されている。鳥川小学校は2009年度の場合、校長1、教頭1、教諭3、養護教諭1、事務職員1、給食担当職員1の合計8名のスタッフで構成され、優れたチームワークのもとに複式3学級6名の児童の教育にあたっていた。

全国的に見れば、へき地の小、中学校は、少子化の進行に加え、山村、離島の著しい人口減少の波にさらされていて、厳しい環境下にある。もとより学校に子どもを託す親は、学習のおいても人間形成においても相当人数の児童生徒の中であれば切磋琢磨によって向上することを期待できるが、小規模校ではその願いはかなわないことが多い。

## 2 訪問の経緯

### 1) 訪問した小規模校

鳥川小学校以外にもゼミの学生とともに訪問した小規模校は4校である。2001年12月に愛知県南設楽郡鳳来町立七郷一色小学校、2004年9月に島嶼部の一色町立佐久島小・中学校、同年12月に都市部の小規模校名古屋市立六反小学校である。

#### i 七郷一色小学校

七郷一色小学校は、新城市から東の山奥に向かってひたすら登った静岡県境にあり、トンビよりも高いところにあると表現されるほど高い山の上にあった。1872(明治5)年に法律「学制」が制定され小学校教育が発足したが、七郷一色小学校は早くもその翌年に設立された学校である。校内参観に続いて体育館で全校児童5人による「黒沢田楽」のお囃子と踊りの練習風景を見学し、答礼としてゼミ生と私

の4人で寸劇を披露した。卒業する6年生が前途の困難に負けないで希望をもって強く生きるようにとのメッセージをこめた学生のオリジナル脚本だった。学生が前日焼いて持参したクッキーを児童と先生方に差し上げ喜んでいただいた。2001年度の児童数は、6年生3名と4年生が2名だけであった。学校は主として黒沢地区の皆さんが支えておられたが、翌14年の3月に6年生が卒業し、進級する4年生2名だけが残ることになり、しかも地区には5歳以下の子どもがいなかったため2002年3月をもって閉校となり129年の歴史に幕を閉じた。2名の新5年生は、町のスクールバスで麓の小学校に通うことになった。

#### ii 佐久島小・中学校

2004年9月、三河湾にある佐久島の小規模校を訪問した。一色町の港から約30分ほど渡船に乗り、島中央部の道を歩いて佐久島小学校(当時、全校児童10名)と隣接の佐久島中学校(同、生徒11名)に着いた。両校の先生方から島の学校の特徴、教育方針、指導上の留意点、「しおかぜ通学」の制度などについて質疑応答を交えて懇切に教えていただいた。「しおかぜ通学」は、「小規模特別認定校制度」として2002年度から実施され、県内全域から佐久島小中学校への通学が可能とされ、島外の一色町に下宿して通学する児童生徒もあり、たとえば不登校気味になった児童、生徒も伸びやかな雰囲気の中で学校生活を送っている。島の港から学校までを往復する途中、何人もの島の人々、とりわけお年寄りが学生に気さくに声を掛けてくださった。島の人々や先生方、児童生徒の心の広さ、温かさが「しおかぜ通学制度」の基本にあることを感じた。グラウンドでは、児童生徒が合同で、間近に迫った運動会のマスゲームの練習を一心に繰り返していた。例年、運動会では、子どもが通学していてもいなくても、島の多くの人々が総出でこの小中学校に駆けつけて応援、参加するそうで、練習に力が入るのもうなづけることであった。

#### iii 六反小学校

山と島の小さな学校を見学したので、「都会の中の小さな学校」について勉強したいと思い、2004年12月15日名古屋市立六反小学校を訪問した。同校は、JR名古屋駅の南へ徒歩1キロメートルの所にある児童数64名の伝統ある小学校である。周りにビルが林立し、昼間人口は多いものの校区内に居住している人は少なく、都会のドーナツ化現象の波に洗われ、将来的に学校統合の可能性がある(現実には2010年3月に閉校となった)という状況にもかかわらず、より高い教育を用意しようと、教員、保護者、地域の人々が心を合わせて努力しておられた。児童の父親を中心とする「おやじの会」が学校への支援活動を活発に展開し、その活動によるビオトープが校庭の一角に作られていた。

## 2) 岡崎市立鳥川小学校への訪問・交流

清流・鳥川川<sup>とつかわがわ</sup>のほとりに佇む山間小規模校鳥川小学校を6年間にわたって訪問した。当初は都市部の学生が訪問することを警戒されたようだが、歴代のゼミの学生は純粋な心で一生懸命児童と触れ合い溶け込もうと努力し、児童ともすぐに親しみ、しだいに学校や地域のご理解をいただき温かい交流が続いた。運動会や学芸会のプログラムにも学生の出演題目を入れて下さるなどの温かいお心遣いをいただいた。学生は、授業参観のほか運動会、学芸会をはじめ諸行事に参加し、児童の真剣な目の輝きや親しみあふれる言動に接して心洗われる体験を重ねた。鳥川小学校PTA、鳥川地区寿会(敬老会)、女性の会、ホタル保存会の皆さんは、何かにつけて学校を訪問し行事等に協力し、学生を温かく見守り声を掛け、「学生が来てくれるから学校も元気が出る」と励まして下さった。

## 3 鳥川小学校における教育

### 1) 地理的、歴史的特徴

旧額田町は、愛知県西三河地域の東の端に位置している。鳥川地区は町の中心部から南東に向かって登った所にあり、四方を山で囲まれ、地区の中央を鳥川川が南から北に向かい鳥川小学校の横を通して町の中心部の方向へ流れている。鳥川地区に湧出する水は全国名水百選に選定されている。鳥川小学校は、1875(明治8)年、額田郡鳥川村ニンヤ慈徳院に宮崎分校として創立され、130年余の歴史がある。1880(明治13)年に額田郡鳥川村鳥川小学校となり、1921(大正10)年に現在地に移転した。1935(昭和10)年ごろは2学級編成だった。開校100周年にあたる1975(昭和50)年に記念庭園、記念碑が完成した。この年に文部省の愛知県へき地教育研究発表会が開催され200名の参加があった。1980(昭和55)年に自然保護活動研究大会で教育委員会賞を受賞した。1983(昭和58)年には壁新聞「かわにな」が環境庁長官賞を受賞した。1993(平成5)年には学校にホタルの幼虫・カワニナの増殖池が造成された。翌年、鳥川ホタル保存会が設立され、毎年近隣からのホタル見物で賑わうようになった。

### 2) 複式学級と教育の工夫

鳥川小学校への訪問で学生にとって幸いだったことの一つは、複式学級の授業を参観できたことであった。大規模校の授業は学生が小中学校時代に経験していても、複式学級の授業を参観できる機会はない。本校を定期訪問しているゆえの得難い経験であった。学生には、「学生がプロの先生の正規の授業を見せていただく機会はめっ

たにない。しかも複式学級の授業は全国の関係者でもほとんど参観できない。本ゼミだからこそ貴重な機会だ。授業参観後に感想を求められたら、お礼とともに学んだことを言おう。授業参観の際にメモをしっかりとるように」と伝え、学生も心を込めて参観と記録に取り組んだ。

授業参観は6回にも及んだ。A 2003年7月9日、M・O教諭の3、4年生「書写(習字)」の授業。2005年11月22日は、B M・S教諭の2年生の「算数」、C S・Y教諭の3、4年生の「理科」、D K・T教諭の5、6年生の「総合的な学習の時間」の各授業。E 2006年11月、S・Y教諭の3、4年生の「理科(実験)」の授業、F 2007年12月、K・T教諭の5、6年生の「道徳」の授業であった。

このうち、B、C、Dの3授業は、同一時間内の授業であったから、学生は3班に分かれて参観し記録した。また、A、E、Fの授業については、それぞれ「完全記録」に挑戦することとし、ゼミ生全員が文字記録、録音、再生、記録整理、編集の役割分担をした。いずれも複式学級の授業を知る貴重な記録となった。一例をあげると、

#### [B 算数(2年生 M・S先生・児童1名)の授業]

2005年11月22日。2年生 算数(かけ算)。1、2年生の複式学級であるが、在籍児童は2年生のY・I君1人。S先生と1対1の授業…かと思いきや、S先生の一人3役の見事な変身の連続で、S先生ご自身の他に生徒役のS君とぬいぐるみのドラえもん先生を演じ分けられ、学習者1人とは思えない楽しい授業が展開していった。

#### [授業の展開]

1 ドラえもん先生が今日のめあてを発表。2 お菓子のフランクを使っての問題を出題。3 Y君が答えを黒板で説明。正解。S君(先生)が違う解き方を黒板で説明。フランクの数を確かめ褒美に1本。4 クッキーを使った問題。Y君が答えを黒板で説明。正解。5 辞書を使った問題を解いて終了。

#### [参観した学生の感想]

複式学級の授業を見学したのは初めてで大変感動した。S先生は、「先生」のほかに、「ドラえもん先生」「生徒のS君」の3役を持たれてすごいと思った。Y君と先生だけでは意見交換もできず、他の生徒の考えに触れる機会がないのでは…と思っていたが、S先生は生徒のS君としての発言もされY君に他の意見を聞く機会を与えられた。Y君が「S君のやり方もいいと思います」と発言したのもほほえましかった。S先生とY君の学びは、30人学級ではできないほど濃くて深いものだった。この授業参観は本当に有意義で、教職を志す私にとって良い学びの時となった。(学生K.N.)



## 4 地域と学校

### 1) 学校行事の楽しさ

学校行事への参加は、地域の人々の学校への協力や心情に触れる貴重な機会となった。

鳥川小学校には自然に囲まれた地域の特性を生かしたものや地域の人々と共に行う行事が多いのが特徴である。少ない人数の児童が常に精一杯活躍する姿に心を動かされることが多く、地域の人々もすぐに寄り集まって楽しい雰囲気が出される。以下は、6行事についてのゼミ生の記録の抜粋である。

#### i 田の草取り、バーベキュー

私たちは、児童の皆さんや先生方、寿会の方々と一緒に鳥川小学校のすぐ近くにある学校田の草取りをした。全員が田んぼの端から1列に並びムラなくきちんと草が取れるようにした。途中、大きな亀の出現に驚かされた。草取りが一通り終わると、田全体に肥料をまいた。草取り終了後のバーベキューでは、寿会の皆さんが育てられた無農薬の野菜が使われた。私は初めて田んぼの中に入った。これまで、裸足で土の上を歩く機会だと思い当たるのは海岸くらいしかない。地面はぬかるんでいて思うように歩けなかった。いい汗を流し、先生方や寿会の方々とお話することができ、貴重な時間を過ごした。(R.I.)

#### ii 川の生き物調査

学校の傍を流れる鳥川川には多くの生き物が棲んでいる。児童がホタルの繁殖を目的に養殖しているカワニナをはじめ、ヤゴ・ドジョウ・ナガレホトケドジョウ・カワムツ・ネコギギ・ドンコ・ヨシノボリ・サワガニ・イシガメなどである。私たち学生も児童たちと川に入って生物を探した。見たことがない変わった生物もたくさん見つけた。名前を児童たちに聞くとすぐに答えが返ってくる。「頼もしい生物博士」との生き物探検で、鳥川がまだまだ自然豊かな地域であることを実感した。(C.K.)

#### iii 運動会

鳥川地区大運動会は、鳥川地区の児童、保護者と地域の人々が小学校のグラウンドに集い、みんなで楽しむ一大行事である。全児童による一輪車演技を目玉に工夫を凝らした競技が盛りだくさんにあり、児童が練習の成果を発表し、両親や地域の方々が子どもの成長した姿を実感する場であり、同時に人々が交流を深める場ともなる。老若男女を問わず、地域が一体となって運動会を盛り上げていく姿勢は素晴らしく、感動させられた。開会式で私たちの大学のプラカードまで用意していただき入場行進から一緒に参加できるなど、鳥川の方々が毎回、温かく迎えてくださ

るおかげで、私たちと児童との距離がどんどん近くなった。児童との交流で印象深いのは、地域の方々が出場する競技を先生方が用意してくださった席に座って見ていると、ある児童が隣にちょこんと座ってきた。あいさつをして一緒に観戦していると、運動会の手伝いに来ていた卒業生である中学生が、「コレいい匂いがするよ」と綺麗な緑色をした葉っぱを持ってきてくれた。見ず知らずの大学生に心を許して近づいてきてくれる鳥川小学校の児童や卒業生の行動は、今思い出しても私の胸を本当に熱くしてくれる。教育は学校と親はもちろん、地域と一体となって行うことが児童生徒のためになるとよく言われる。しかし、都会では、下校時にタバコを吸う生徒を見かけても地域の人々が注意しなかったり、生徒が騒いで近隣の方に迷惑をかけてもその場では注意せず後になって学校に電話をしてくるという間接的なお叱りばかりだ。鳥川地域の絆はこれとは違い、運動会があると聞けば児童8人の学校に100人を超える人々が駆けつけ、卒業生も休日を返上して後輩の応援にやってくる。こんな温かい環境で育つ児童は、私が運動会で感じたように温かいコミュニケーションをとれる子に育っている。周りの大人が信じられる存在でなければ、このように成長することはできないだろう。(T.N.)

#### iv 学芸会

私たちが鳥川小学校に着いたときには、小さな体育館にはすでに学芸会の始まりを待つ地域の方々が集まっていた。その人数は全校児童の10倍を超えており、都市部の学校では考えられないことだ。私たち学生の席は最前列に用意されていた。学芸会が始まると次々と児童たちと先生方による演目が進む。楽器の演奏、詩の暗唱、落語の朗読などがあり、その内容も迫力のある太鼓からユーモアのある詩など、楽しいものばかりだった。演目一つ一つからこの日のために一生懸命練習してきたことが伝わってきた。最後に全校児童と先生方が一緒になって作り上げたミュージカルがあり、とても感動した。小学生が演じる劇だが本当にいいものを見た気分になった。こんなにも地域の人々が集まる学芸会が他にあるだろうか。一人の児童がこんなに多数の演目に出る学芸会が他にあるだろうか。全員が一つになって劇をする学芸会が他にあるだろうか。そんな学芸会ができるのが少人数の学校の良さであり、鳥川地域の良さなのだと感じた。(S.M.)

#### v 三代のつどい

三代のつどいは、初冬に行われる鳥川小学校独特の行事である。親、子、孫の3代が一堂に集い交流を楽しむ。年によって内容に工夫が凝らされる。竹とんぼやわらじを作ったり、健康体操や講話を聞いたり、一緒に遊んだり、餅

つきを楽しんだり、昔からの遊びや伝統を親から子そして孫に伝え合う。地域の方々による餅つきは軽々と簡単そうに見え、「やったことないけど、これなら私もできるので？」と思っていた。地域の方の勧めで私も餅つきをしたが、想像以上に杵が重くて自分の思い通りには動かさなかった。児童たちは餅つきに大変興味を持っていて、「やりたい」と積極的に参加していた。とても一生懸命で楽しそうだった。地域の方々は声援したりコツを教えたりと、みんなサポートしており、鳥川の児童たちが周りの方々を支えられて様々なことにチャレンジできるのだということが理解できた。つきたての餅を食べた。何個もいただいた。(S.K.)

#### vi 山の整備活動

鳥川地区を取り囲むようにそびえる山々に山道を整備しようという試みは、ホタルの保護活動と密接に結びついている。山が健康でなければホタルが生息する豊かな川はできない。鳥川の山は、自然林に対して人工林の割合が8割強で、中は薄暗く気味が悪い感じで、このままでは川は疲れ、肝心のホタルも減ってしまいかねないので、少しずつでも間伐や枝打ちなどで山を明るくする必要があった。そこで地域の人たちは山道整備という新しい取り組みを始めた。特に岡崎市と合併してからは、市民の散策コース作りの意味合いが加わり、「ホタルの里の山歩きコース」として整備されるようになった。この活動には、山の豊かさを取り戻したいというみんなの思いが込められていた。(M.K.)

学校の整備活動の日は雨が降り、山登りにはあいにくの天気だったが、児童たちは、楽しそうに走って山を登っていった。元気さに圧倒されながら私たち学生も必死で後を追った。今回の山道整備の目的は、山に登った人が記念に鐘をたたけるよう山のポイントとなる地点に児童たちが作った鐘をつけることであった。山の名前を記した立て札も立てられ、散策コースの来客への温かいもてなしとなっている。意外に重い鐘を持ちながら歩く児童に整備をなさる地域の方々は、「重いなら学生さんに持ってもらいなよ。」と優しく声をかけ、見守っておられた。山登りが始まった理由は、鳥川の子どもたちが山の自然と自分たちの住んでいる地域を知って成長してほしいという思いからだという。家庭だけではなく地域全体で子どもを育て見守ろうという温かい思いが感じられた。(S.K.)

## 2) 学校と地域の思い

### i 校長への聞き取り

教職員も児童の数もひと桁という小規模の学校であるため、学校の維持管理や学校行事の運営などで学校の力だ

けではこなしきれない面が生じる。学校からの支援要請があれば地域の方々がすぐに対応される。鳥川小学校は常に「頼もしい助っ人」に支えられている。

#### 〔学校環境の整備における地域からの支援は？〕

児童、教職員合わせても20名以下のへき地小規模校では学校環境の整備は大変なこと。鳥川小学校では保護者会や寿会(敬老会)に年3回ほど作業をお願いしている。5月には、寿会の会員64名中平均30名が参加し学校の敷地の草取り・枝の剪定・溝の泥さらいなどの作業を行う。6月には、児童・職員と保護者(実家庭7戸)の応援を得てプール掃除を実施。10月には、寿会の会員による環境整備作業を実施している。

#### 〔学校行事における地域からの支援は？〕

地域から支援を受けている行事は、まず、子どもの健やかな成長を祝う「子どもの日祝賀会」。5月の子どもの日前後に地元議員・区長代表・PTA会長、保護者、児童・職員が参加し、午前の前半に小運動会を行い、後半は子どもの日祝賀会、最後に山菜御飯や柏餅などで会食をする。会食は、昔から女性の会(昔の婦人会)の役員が中心となって作っていただいている。「鳥川三代のつどい」は、3代が一堂に集い、家族がいっそう仲良く幸せに暮らせるようにと毎年12月に行う。朝早くからセイロを蒸し上げ、餅つきの準備をする。年によっては、わらじ作り、たこ作り、こま作りを児童に教えたり、グランドゴルフ、ゲートボールなどで一緒に遊んだり、昔の生活や仕事についての語りや質問会などを行い、変わらぬ愛情を学校と児童たちに注いで下さる。

#### 〔学校田(畑)に関する地域からの支援は？〕

以前は、周囲を網で囲っただけの畑で、収穫前にサル、シカ、イノシシなどに荒らされ、児童は収穫の喜びを味わうことが少なかった。2002(平成14)年度に寿会の幹事会で畑の実状を話し協力を依頼した。畑の片付け、整地、野菜づくり、測量、間伐材の切り出し、間伐材の皮むきと組み立て、基礎用溝掘り、ブロック積み、ネット張りなどの支援である。このうち軽易な作業には児童も参加し、寿会の皆さんと楽しげに会話をしている。

#### ii 地域の人への聞き取り

地域には、PTA、ホタル保存会、寿会、女性会などがあり独自の活動をしているが、相互に連携を取りつつ学校を支援している。ホタル保存会や寿会は、ホタルの幼虫やえさのカワニナを養殖する施設をはじめ、サル、イノシシ、シカから学校の畑などを守るための囲いや学校の裏山の間伐材の切り出しと利用など、年間を通じて作業奉仕をしている。学校行事への参加と支援も積極的である。しかし、私たちの気持ちとしては、支援するというよりは子どもたちにお

んぶしてもらっている状況といったほうが合っている。子どもたちがホタルなどを守り、私たちは、ホタルを知ってもらうために川の周辺の草刈りをしたり、学校の玄関横に生態模型を作ったり、道路に「ホタルの村」などのモニュメントを付けたりなど、子どもたちができないところをサポートしているだけだ。

### iii 寿会の人への聞き取り

鳥川小学校の児童数が極めて少数になったことはやはり寂しい。でも鳥川や鳥川小学校を大事にしている。少子化や過疎化などの戦後の大きな変化は、見えることや事物が変わること以上に心の方が大きな変化を受けている。このことをきちんと受け止め、現状改善のための様々な取り組みの中でしっかりと地域の伝統を受け継いでいこうと思っている。

## 5 結び

### 1) 閉校後の学校

訪問した小規模校5校のうち3校、すなわち、鳳来町立七郷一色小学校は2002年3月に、岡崎市立鳥川小学校と名古屋市立六反小学校は2010年3月にそれぞれ閉校となった。

時代の趨勢とはいいいながら、地域の人々の寂しさは十分に推測することができる。

ところで、閉校の際には通常2つの問題が生じる。1つは児童生徒の通学方法であり、もう1つは残った校舎等施設設備の活用方法である。まず、児童生徒は近隣の比較的近い学校に通学することになる。公共交通機関が少ないこともあって、自治体が用意するスクールバス(タクシー)を利用して通学する。中学生になると、時間帯に制限があるスクールバスは部活動をはじめ多様な教育活動の終了時刻に対応しにくい。ため、生徒寮を用意する中学校もある。小学生の場合は、いきなり多人数の学校・学級に入れられることによる心理的なストレスを緩和する必要があり、閉校とともに異動する教員の中から受け入れ校の教員として1、2名を赴任させるなどの配慮もされている。鳥川小学校でも2010年3月の人事異動で1名の教員が受け入れ校へ移っている。

もう1つの課題である閉校後の校地校舎の活用については、さまざまな方法が案出されている。山間、島嶼部の学校では、校舎を利用した山の学校、地域の集会研修施設、青少年宿泊研修施設、大学の運動部、文化部、ゼミ等の利用施設、名産品の集荷・直売所などへの転用がされている。鳥川小学校の場合は、ホタルのふるさと学校として、地域の集会・研修施設や市の資料保存所として再出発した。七郷一色小学校のように山深くで支える集落が小さい場合は、

外部機関による跡地活用が図りにくいのも現実である。名古屋市立六反小学校の場合は、名古屋駅から徒歩10分の立地であることから、風俗産業の進出を危惧する地域の人々の声を受けて、不登校生徒を受け入れる私立中学校として2012年4月に開校するという案が公表された。跡地利用の形は様々であるが、長年にわたって地域の精神的な支柱であった学校であることを踏まえ、可能なかぎり地域の意向を生かす方向で適切な利用案を導き出すことが自治体に課せられている。

### 2) へき地教育の課題

文部科学省の「学校基本調査」によれば、2009(平成21)年度における全国のへき地校数(公立)は、小学校3,113校(前年度比130校の減)、中学校1,316校(前年度比38校の減)である。へき地校の在籍児童生徒数は、前年度比小学校6,756人減、中学校3,722人減、合計10,478人の減少である。学年進行等があるので単純計算では計れないにしても、へき地校の統廃合によって年間相当数の児童生徒が地元を離れて統合先の学校への通学を余儀なくされていると見ることができる。我が国は、少子化や過疎化、景気後退に伴う市町村の負担増の傾向が続いており、へき地校の統廃合は更に進む者と予測される。これらの要因の克服は国のありようと密接に関連しつつ、今後も重要な課題であり続けるものと思われる。

閉校が話題に上っている小規模校については、設置する自治体が閉校検討委員会などの会議を発足させ、その結論を尊重して閉校にするか否かを決めるのが通常の形である。会議のメンバーには地域の関係者が参加しており、小規模校は行き届いた教育ができることや多数の卒業生があり地域の心の拠り所であることなど学校存続への心情が語られることが常であるが、児童生徒の絶対的な不足や非効率な諸経費などの指摘の前には効果的な存続論は展開しにくい。また、小規模校では、教員と児童生徒の間に展開されるマンツーマンの行き届いた教育がある反面、集団による児童生徒間の切磋琢磨が質、量ともに不足がちであることから、統合先の新たな多人数集団の中で積極的に交わり前向きに生きる方法を身につけさせることに意義が認められことも閉校を後押しする根拠になっている。

小規模校を存続させる方法の1つとして、佐久島小中学校の「しおかぜ通学」制度のように、不適応や不登校気味の都市部の児童生徒を小規模校に受け入れて在籍者を増やすとともに、一人でも多くの子どもを救う「癒しの学校」として存続させるなどの努力をすることも意義深い。地域にはそれを受け入れる自然も人材も豊富である。

校地校舎などの「モノ」は遺されるにしても、地域の人々の児童生徒への「愛育の思い」をどのような形で次代に伝えていくかは、教育行政に課せられた大きな課題である。

#### 参考文献

文部科学省(2008): 学校基本調査(2007年版). 文部科学省, 東京.

The Present Condition and a Subject of Education in Remote Areas:  
The Visit and Exchange for Six Years at Place-between-mountains  
Small-scale Elementary School

Mashio MATSUBARA

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Nagoya Campus),  
2-13-32 Marunouchi, Naka-ku, Nagoya-city, Aichi 460-0002, Japan

**Abstract :** The number of remote schools is decreasing in all parts of Japan year by year. As for the place-between-mountains, the peninsula part, and the island part, the same phenomenon has occurred with doughnutizing of population even in the central part of the big city. Although each self-governing body is doing its best in continuation, the pressure of decrease in population and a decrease in the birthrate, and in the fiscal burden, the historied elementary and junior high schools since Meiji are closed. I led the seminar students of the former university to those six schools. The center of the visits was the Tokkawa elementary school in the Nukada area of Okazaki city (place-between-mountains, small-scale school, with all the six children in fiscal 2009. The school closed in March, 2010.) from April 2003 through March 2008. In this report, I responded to the students' efforts, the teachers' devices, and the thoughts of the people in these areas, through the visit and exchanges, and while recording the outstanding education a remote school has. And I've verified about the subject in connection with closed school.

(Reprint request should be sent to Mashio Matsubara)

**Key words :** Remote school, Small-scale school education, Combined class, A thought of the area, The subject after closed school